

詔勅の文章について—阿衡の詔勅・勅答をめぐって—

滝川幸司

宇多天皇（在位887-897）が藤原基経（836-891）に答えた勅答に「阿衡」の語があったために起こった阿衡事件については、近年、古代史研究に於いて、政治的・制度的課題について議論が深められた（今正秀「阿衡問題考」〈日本史研究621、2014〉、古藤真平『宇多天皇の日記を読む 天皇自身が記した皇位継承と政争』〈臨川書店、2018〉など）。しかし、漢文学研究の立場としては、明経道、紀伝道が提出した「阿衡」の勘申を読解する必要もある（私見の概要は、滝川『菅原道真 学者政治家の栄光と没落』〈中公新書、2019〉に述べた）。が、それ以前に、阿衡事件を引き起こした、橘広相（837-890）起草の勅答について、正確な読解が行われていないことこそが問題だと考える。

本報告では、広相作の阿衡勅答を読解する。但し、この勅答は、宇多天皇の最初の詔勅に続くものであり、まずその詔勅自体も確認しなければならない。さらに、その詔勅は、前朝、光孝朝（884-887）における太政大臣職掌問題（884）とも関連する。太政大臣の職掌を定め、陽成朝（876-884）と同じように補佐せよと、藤原基経に命じた光孝天皇の勅に「阿衡」が出てくるのである。こうした流れを踏まえ、阿衡の詔勅・勅答全体を読解することが必要だと考える。

平安朝漢文学研究では、詩の研究が中心で、詩序を除けば文章（散文）がとり上げられることはいまだ少ない。中でも詔勅の文章については希である。しかし、儒家が腐心して作った文章であり、平安朝漢文学の総合的な理解のためには、詔勅の読解は重要な課題であろう。今回詔勅を取り上げるのも、そうした意識に基づく。広相作の詔勅・勅答を正確に読解することによって、当時の詔勅の文章、文体の把握に繋げたいと考えている。